

『栗山大膳』ノート

稻垣達郎

『栗山大膳』は、一九一四年（大正三年）八月、鷗外かぞえ年五十三歳の作である。その年の日記八月十二日のくだりに、「夜栗山大膳を書き畢る」とみえており、十四日には、「栗山大膳を太陽編輯局に交付す」とある。稿を起したのはいつであつたか知るされていないが、いつもの制作工程からみて、十二日をさかのぼることいくばくもなかったと思われる。また、さらにさかのぼって、七月七日の条に、「太陽の鈴木徳太郎来話す」とあるのは、ことによると、寄稿依頼の件であつたかもしれない。およそのところ、このあたりから、今度の題材なり、主題なりが、心にかけられたものであらう。

この年の五月四日から十九日へかけて、鷗外は、軍隊衛生視察のために、仙台をふり出しに、東北・北海道の各地をめぐり歩いたが、七日には盛岡にいたり、たまたま、栗山大膳の墓碑をみた。この旅の記録が、『北遊記』と題されて、この年八・九月の「心の花」に連載されたが、その一節に、「次に栗山大膳の墓と称するものを訪ふ。墓石と巨碑あり。墓石には涼岸良照禪定門云々と刻す。巨碑は字細く苔に掩はれて読むべからず」とある。鷗外

が、栗山大膳について、何らかの正史的関心をもった機会は、遠く一九〇〇年前後の、かの小倉時代にもなくはなかったであろうが、ほかの時期においてではなく、この年に『栗山大膳』を書いたことの根拠の幾パーセントかは、この視察旅行のみならず大膳の墓碑をみたことに関係していることも疑えないであろう。

かくて、『栗山大膳』は、この年九月の「太陽」第二十巻第十一号に載ったわけだが、じつは、鵜外にはかならずしも快心の作ではなかった。あくる一九一五年（大正四年）一月の「心の花」へ書いた、例の『歴史其儘と歴史離れ』で、かれの「歴史上の人物を取り扱った作品」が小説であるかないかの論にからみながら、その間の事情にふれて、つぎのようにいっている。「わたくし自身も、これまで書いた中で、材料を観照的に見た程度に、大分の相違のあるのを知つてゐる。中にも『栗山大膳』は、わたくしのすぐれなかつた健康と忙しかつた境界とのために、殆ど単に筋書をしたのみの物になつてゐる。そこでそれを太陽の某記者にわたす時、小説欄に入れずに、雑録様のものに交せて出して貰ひたいと云つた。某はそれを承諾した。さてそれが例になくわたくしの校正を経ずに、太陽に出たのを見れば、総ルビを振つて、小説欄に入れてある。殊に其ルビは数人で手分をして振つたものと見えて、二三ペエジ毎に交つてゐる。鉄砲頭が鉄砲のかみになつたり、左右良の城がさうらの城になつたりした処のあるのも、是非がない」というのである。

この作品の發表について、作者の意志が尊重されなかつたこと、ならびに、雑誌記者の無知と不手際とにたいする不満を表明しているものではあるが、作品自身にたいする作者みずからの不満足も、同時に語られていることはあきらかであらう。単に、「歴史上の人物を取り扱った作品」の小説・非小説の「判断はなか／＼むづかしい」ものであることだけの一例として『栗山大膳』を引き合いに出したものはかぎらない。この作品が、そうした類の

なかにあっても、出来上りの上において、やや異例であることの一種の弁明としても役立てられている。「小説欄に入れずに、雑録様のものに交ぜて出して貰ひたい」というのは、ジャンル上の曖昧性ないし未決定性を意味するだけのものではなく、造型の不完全性をも認めているものにちがいない。「すぐれなかつた健康と忙しかつた境界とのため」であつたことも事実であろうが、けっきょくは、「殆ど単に筋書をしたのみの物」にしかならなかつた。それはまた、「材料を観照的に見た程度」が、けつして十分ではなかつたことでもあつた。こんな事情があつたから、小説・非小説という点からみれば、小説的なものよりも、いっそう非小説的なものへ傾斜してしまつたと考えられたのであらう。だから、ことさらに小説欄を避けて、雑録様のものといつしよに取り扱われることをのぞんだわけだ。ということとは、この作品において、小説以外のあらたなものを創出しようとする積極的意欲を反省しようとしているのとはまったく反対に、小説造型の不完全ないしは歪を感じていたことを意味しているにちがいない。もし身邊の状況がよく、観照がゆきとどいて、「単に筋書をしたのみの物」に終らなかつたとしたら、これまでつねにそうであつたように、小説として取り扱われることに、べつに異議をさしはさまなかつたであらう。ひらたくいえば、この作品は、小説としては出来そこなつたものであることを、正直に語っているものとみていい。あれほどの自信家の鷗外にしては、ふしぎなほどの弱音だといえよう。

とにかく、作者自身の心持では、この作品を小説とみなし、または、みなされることについて、何かびつたりしないものがあつたのだ。一九一八年（大正七年）二月に、小説集『高瀬舟』を刊行した時には、これを加えず、一九一九年（大正八年）の暮れに出た『山房札記』のなかへ、『梶原品』・『都甲太兵衛』・『寿阿弥の手紙』などの、世に史伝物といわれるものと一括して収めていることは周知のとおりである。

しかし、それにもかかわらず、この作品集のなかにあつては、『栗山大膳』と『津下四郎左衛門』の二篇は、他の諸作とは、かなりちがった風采を示していることも事実である。森潤三郎は、『鷗外森林太郎』のなかの「十五、考証学者伝記の研究」の一節で、「これまでの兄の書いた史伝は、『栗山大膳』も『津下四郎左衛門』も、この『相原品』も文学的色彩があつたが、『相原品』に続いて一月十三日より両新聞（※『東京日日』・『大阪毎日』）に掲載された『澠江抽斎』から、愈本格的で新工夫の史伝が始まることになつた。兄は元来物事を中途半端にし置く事の出来ぬ性質であるから、いつまでも小説とも見られ歴史とも見られるやうなものを書いて満足する事が出来なくなつたのである」といつている。だいたいこのとおりだと思ふが、ひとくちに「文学的色彩」といつても、『栗山大膳』・『津下四郎左衛門』（※一九一五年四月「中央公論」）の二篇と『相原品』（※一九一六年一月「東京日日・大阪毎日新聞」）とは、かなり大きなちがひがあることは見逃せない。『相原品』では、もうあきらかに「新工夫の史伝」の性格が出来上つてゐる。鷗外がいうがように、「創造力の不足と平生の歴史を尊重する習慣と」（※『相原品』六）が、しぜんにこういう形式を成立させたのであらうが、その発想の過程と方法とにおいて、小説意識が、かなり強く排除されていることが、はっきり認められる。が、まえの二篇、とりわけ『栗山大膳』においては、そのような小説排除への意識が、強いものとしては感ぜられない。これらには、「文学的色彩」があるというよりも、「小説的色彩」があると表現する方が、いっそう適切であることを思わせるのである。

このようにして、『栗山大膳』における小説意識の存在は、そうとう強度なものでありながら、小説としては、けつきよく半産してしまつたのだった。が、反面における、史伝物への意識も成熟するところなく、拡充されないままに放りだされたかっこうになつてゐる。しかし、こんなかたちで、歴史小説と史伝物とのおのずからの架橋に

なっており、そこに、鷗外作品史上における注意すべき特別の地位と意味があるものといえよう。

つぎに、『栗山大膳』を書くにあたって、鷗外が原據としたものと考えられるいくつかの史料との関係を追いつながら、右にいった事情にも、具体的にふれてゆきたい。

※ちなみに、「太陽」に出た時には、秋期大附録として、白鳥・花袋・未明・李太郎・秋声らの小説といっしょに載ったわけだが、目次と創作欄の中扉で、右の人人のものと一線を引いて区別してある。こういうところでだけ区別を設けているところに、ジャーナリストとしての、この作品に対するジャンル感と作者への弁明がのぞいているといえよう。

※鷗外は、『興津弥五右衛門の遺書』や『阿部一族』などにおいては、初出のものにかなり修正をほどこして単行本へ入れていることは周知のことだが、この作の場合は、条件つきで出来たものでありながら、根本的な思想に変更を加える必要がなかったゆえか、単行本へ入れるにあたって、本来なかったルビをとりのぞき、いく箇所かの訛点をあらため、いくつかの文字を訂正し、章をあらためてあったところをつづけたのが一ヵ所ある以外は、初出と異なるところがない。ただ、年号を書き直したために、かえって誤となったところがある。総じて、『栗山大膳』をもって、出来上ったものは出来上ったものとしてそのまま承認しようとしているからであろう。

☆☆☆

『鷗外森林太郎』は、この作品について、「曩に北遊の際盛岡でその墓を見、小倉在任時代福岡で見聞した資料に拠って書いた」(※十四「歴史小説の製作」といっている。鷗外が、栗山大膳という、これまでには講談や芝居の主人公でしかなかった人物について、歴史的に何らかの心をよせる機会が、かの小倉時代においてもありえたらう

ことを、まえにもいった。小倉時代においても、というより、むしろ、おいてこそありえたかもしれない。自己の善意が対者から承認されないで、次第に食いちがいを深め、破綻するまでにおちこんでゆく。大膳の場合、善意は、けっきょく滴たされはしたが、そして、かなりな程度の自由な境界ではあったが、それでもやはり、配流の地に生を終えなければならなかった。そうした境界が、任地として離れたことのない東京を追われ、「左遷」の身の上であった鷗外に、まったく無関係ではありえないはずだ。「左遷」の忿懣を、歴史への没入によって処理しようとしていた鷗外であり、また差当っては、北九州の郷土史に興味を見出そうとしていたかれであってみれば、「福岡で見聞した資料」のうちに、大膳関係のものをみつけたとしたら、これに心をとめることは、もとより自然であろう。しかし、「福岡で見聞した資料」が何であったかは、まったくわからない。『小倉日記』には、歴史資料の見聞について、見聞の都度、かなりしばしばの記述があるが、前後四回の福岡行に際しても、この記述は見当らない。けれども、記述がもれていることは、見聞がなかったことを意味するものではない。見聞をしたかもしれない、また、事実、したものと思われる。それに、記述はないといったが、資料の見聞についての具体的な記述がないことをいうので、例えば、定期巡廻のために、二回目に福岡へ行った一八九九年（明治卅二年）九月の二十六日に、金竜寺に貝原益軒の墓を拜していることなどは、やはり注意しなければならないものだ。益軒には、いうまでもなく、『黒田家譜』・『黒田統家譜』・『黒田家臣伝』その他の、黒田家関係の著述があるからである。そこから、大膳関係の資料の見聞に及んでゆくことは、きわめてありうることだ。鷗外の頭の片隅には、すでに小倉時代から、大膳関係資料の輪郭のようなものが宿っていたとみなしても、空想にすぎないものとはいえないであらう。が、それにしても、『栗山大膳』の制作にあたり、座右において直接典拠として用いたものは、『栗山大膳記』・

『栗山大膳記事』・『盤井物語』・『西木子紀事』・『内山家蔵古文書』・『西木銀山居士碑銘』・『黒田家譜』・『黒田家臣伝』などであり、そのほか、一般的には、『徳川実記』や、例の『武鑑』などが、あわせて参照されたものと考えられる。なかについて、『栗山大膳記』・『盤井物語』・『西木子紀事』・『黒田家譜』の四部が、本的なものであり、『栗山大膳』の大部分、あるいはもっとも重要な部分は、ひたすらこの四部を材料とすることによって支えられており、それらを通ることによってはじめて作品として成立しえている。四部のうち、『黒田家譜』をのぞく他の三部は、この作品が書かれる三カ月まえの一九一四年（大正三年）五月に発行された国書刊行会本の『列侯深秘録』所収のものによったにちがいない。証拠をあげる煩をはぶくが、鷗外が歴史小説の史料として用いるものが、いつも比較的ありふれた文献であり、珍書稀覯書のたぐいでないものが多いことが、このあたりにもうかがわれるわけである。

☆☆☆

そこで、まず、『栗山大膳』が全体の展開の上で、それぞれの部分が、何を原拠としているかを示すことにしたい。この作品は六つの部分から成り立っている。が、見出しも番号もない。かりに、第一章・第二章等をもってよぶことにする。原拠の方は、『栗山大膳記』・『盤井物語』・『西木子紀事』などについては、その下へ国書刊行会本『列侯深秘録』の頁数を示し、特に『栗山大膳記』の場合は、さらにその下へ日本数字をつけるが、これは一ツ書きになっている原本の記事にわたくしにつけた番号である。『黒田家譜』については、おなじ要領で、益軒会編纂『益軒全集』巻之五の頁数を示すことにする。『栗山大膳』の一本（※かりに岩波版全集など）をとり、それぞれ

れの個所の頁数をあげ、原拠のそれとを、たがいに対照併記したら、事情が非常に明確になるのだが、やや煩しいので、原拠の方だけを、『栗山大膳』中の事項の展開の順序に應じてあげることにする。原拠をこの配列にしたがってみてゆけば、事項あるいは事件にかぎっての、『栗山大膳』のだいたいの輪郭が浮かびあがることになるはずである。

第一章 寛永九年、筑前国福岡の城主黒田右衛門佐忠之と、先代からの家臣で家老たる栗山大膳利章とは、今きわめて緊迫した間柄になっている。利章は、豊後国日田にいる徳川家の目附役竹中采女正に宛てて、忠之に叛逆のくわだてがあるとの密書をおくり、途中、忠之の見廻役に発見されて城内が緊張する。

○栗山大膳記42四、○同40一・二・三、○同41三、○同42四、○黒田家譜卷十四419、○栗山大膳記42四。

第二章 利章の父栗山利安が播磨国姫山城主黒田官兵衛孝高（※のち如水）に仕えて功績あり、さらに、孝高の子長政にも忠勤をはげむ。慶長五年、家康の上杉攻めに長政が従った留守中、大坂が陰悪になったので、長政の母と妻を、苦肉の策をもって九州中津川へのがれさせる。関ヶ原の役に功があった長政は筑前の国をもらったが、つづいて大坂冬の陣・夏の陣を経過し、その間、利章は父と共に奉公し、忠之が生れ、やがて長政が歿して、利安は剃髪隠居する。（※「太陽」初出の時は、ここで章をあらためてある）。忠之は、壮年の身を以てたちまち大名となつて、嬖臣倉八太夫を登用する。藩政が家老を無視してすすめられる。家老はついに利章の執筆にかかる諫言書二十五ヵ条を出し、忠之と利章の対立がいよいよ深刻になる。たまたま、肥後守加藤忠広に逆心の疑があつて下ってきた上使から忠之の迎接使十太夫が辱を受けたのを機に、忠之の利章への興奮はその

極に達する。ほぼ天正六年から寛永九年にいたる事柄である。

○盤井物語5、○黒田家譜卷之二49、○同5253、○同卷之二56、○同卷之九267、○同269、○栗山大膳記事7273、○黒田家譜卷之九270271、○同271273、○同卷之十四394395、○同397、○同427、○同429430、○盤井物語1（ならびに栗山大膳記50二七）、○盤井物語1314、○同10、○同（諫言書）13111415、○栗山大膳記4748一四、○盤井物語2、○栗山大膳記50二七、○同51二八、○同40一、○同5051二八。

第三章 徳川の命によって、忠之は家老の黒田一成・小河内蔵允を伴って参府する。一方、福岡では、家老以下一同籠城と決し配備がきまる。忠之の取調がはじまる。利章が竹中采女正に伴われて江戸に着く。一成・内蔵允・十太夫などとの対決となる。取調の結果、忠之には逆心の事實は認められない。判決としては、不調法の廉で筑前国を召し上げられるが、祖父以来の戦功と本人の実意が認められて、新たに筑前国の拝領を仰せつけられる。利章は、忠之逆心の密告は、虚構の非常手段によって、反対に、主君を安泰におこうがための苦衷であったことをあきらかにする。利章は南部山城守へお預けとなり、十太夫は剃髪して高野山へ登ることとなつて、事件は落着する。寛永九年から翌十年へかけてのことである。

○栗山大膳記42五、○同51三〇、○同5253三一・三二、○同43六、○同43八・九、○同44一一・一四（ならびに盤井物語3）、○同44一一、○同44一二、○同45一三、○同48一七（ならびに盤井物語3）、○同50二三、○同48一六（ならびに盤井物語3）、○同4849一七、○同49一二、○盤井物語5、○栗山大膳記50二四、○盤井物語5。

第四章 利章、嫡男大吉・譜代の者共数十人をつれて盛岡城下へ遷る。忠之逆心の密告という非常手段に訴えた時の、最悪の場合に対する用意。

○盤井物語17、○盤井物語（梶原家所持拜賜刀之記）18、○内山家蔵古文書63、○西木子紀事58、○栗山大膳記49一九。

第五章 盛岡城下謫所における利章。代官井上某との対談による軍法論・良臣論・士志論など。

○西木子紀事54、58、55、55—56、57、58、57。

第六章 利章歿。婿養子のこと。謫地へ従った家来のこと。嫡男のこと。

○西木子紀事58、○盤井物語9。

この作品にさきだつ『安井夫人』（※一九一四年四月「太陽」）と『堺事件』（※同年二月「新小説」）の二作においては、原拠としてとりあげられたのは、それぞれ一冊の文献にすぎなかった。わずか一本に即して、それを駆使しながら、おそらくは比較的たやすく小説にしあげたのではないかと考えられる。ところが、それらにつづく『栗山大膳』は、どちらかというと小冊子にぞくするものではあるが、さきに指摘した四部（※『黒田家譜』は、かなり大部である）を中核として分析した上に、その他いくつかのものを参照してはめこんでいる。史料の操作が、まへの二作にくらべて、いったいによほど複雑だ。しかし、もとより、この程度の史料の操作に混迷するほどの能なしの鵬外ではない。あるところでは、史料にそのまま身をまかせながら、簡潔に書きかえることによって新たな生命をふきこみ、また、他のところでは、史料を要約することによって立体化してこれを深かめ、さらにまた、錯雑したものをときほぐして合理的に秩序だてなどして、まさしく自由な腕をほしきままにふるっている観がある。部分的にみれば、まことにあざやかな史料操作だといわなければならない。しかるに、さきにいつたように、小説・非

小説にからまる根本的態度において不確かなものがあつたために、結果としては、一種ゆがんだ作品とならざるを得なかつたわけだ。

※なお、史料操作の間において、小さな見誤り、思いちがいが数カ所あるようだ。鵬外の歴史物には、この種の見落としが、ときおりみうけられるのだが、この作品におけるものはまだ指摘されていないので、ついでをもつてあげておこう。

(1) 徳川家康が会津の上杉景勝を攻めた慶長五年を、『山房札記』では四年とあらためたが、これはかえつて誤だ。その少し先で、「翌慶長五年関ヶ原の功に依つて」とある「翌」にひつかかつて誤り改めたものであらう。ほんとうは、初出の「翌」が余計なので、「同」にあらためるべきだったのだ。

(2) 利章の盛岡下りは、寛永十年であるべきを十一年とし、そのため、徳川の目付への密書事件が、一年前であるべきを二年前とした。※月については、三月末と五月の兩説がある

(3) 利章の命日は、承応元年三月二日だが、一日としている。

(4) 利章の次男は吉次郎だが、吉次としているところもあり混乱がある。

(5) 対決の時の立会人秋山修理亮は、秋元の誤。

(6) 盛岡での婿養子は原據である『西木子紀事』には内山善助とあるが、これを善吉としている。(※人物そのものが史実としてはやや不確実らしいが)

(7) 十太夫組下のための足輕は二百人であるが、三百人としており混乱している。すべて、初出・単行本を通じての誤である。

☆☆

作品の性格のゆがみについての説明はあとでこころみたいが、史料の操作—芸術形象化に関する右にかりにいった三つの場合を、例示することにしよう。

a・史料に即しながら、そのなかへ樂樂とはいりこみ、中核をとらえて、そこから浮かびあがり、現実を簡潔

に具象しているもので、そういうところがこの作ではかなり多い。とくに、第一章の前半・第二章の前半・第三章の各部分・第五章などにおいて、しばしばみられるところである。だいたい、『栗山大膳記』・『黒田家譜』・『西木子紀事』などの具体的な記述によった場合に多い。

○栗山大膳記 41三

六月十三日、忠之公、御焚火之間に御譜代之侍、老若十四五人相詰居候、其内黒田市兵衛、岡田善右衛門兩人召出され、御直に被_レ仰聞候由にて、唯今大膳方へ参可_レ申は、此間の気色様子段々御聞被_レ遊候へば、歩行不_レ叶体には無_レ之由にて、御直に不_レ被_レ仰聞候而は不_レ被_レ爲_レ叶御用有_レ之候条、手を引れ候ても可_レ罷出_二候、御逢被_レ成様子可_レ被_二仰聞、由可_レ申との御意に付、兩人大膳方へ参、暫有_レ之、市兵衛、善右衛門罷帰候処に、又々御焚火之間に御出被_レ成、様子被_二聞召_一候兩人申上候は、御意の趣大膳へ申聞候へば、委細奉_レ畏、早々罷出可_レ申候へ共、兩人見申候通り平臥に居申仕合に御座候得者、中々登城難_レ成候、随分療治仕、歩行相叶申様に罷成候は、出仕可_レ仕之旨御請申上候、重而御意には、又兩人栗山方に参り、假令道にて目舞仕候共、致_二登城_一御詫言可_レ申上_二儀に思召候_一此上は粟物にて御城内迄可_レ罷出_二候、斯様被_二仰出_一候は何之御底意も無_レ之、乍_レ去此上にても登城不_レ仕候は、忠之公大膳宅へ御成被_レ遊可_レ被_二仰聞_一旨、御口上被_二仰合_一即兩人御前を罷出、(下略)

○栗山大膳・第一章 (岩波旧版全集著作篇第六卷3・4頁)

それから六月十三日になつて、忠之は黒田市兵衛、岡田善右衛門の二人を利章の所へ使に遣つて、歩行の協はぬ程の重体ではあるまいから、縦ひ手を引かれてでも出て貰ひたいと云はせた。利章は歩行が出来ぬから、いづれ全快した上で出仕すると答へた。忠之はすぐに黒田、岡田の二人を再度の使に遣つて、縦ひ途中で眩暈が起つても、粟物で城内まで来て貰ひた

○黒田家譜 卷之九 271

い。それもならぬなら、当方から出向いて面会すると云はせた。利章は又どうしても全快の上でなくては出ぬと答へた。

かゝる所に家康公へ同意の諸大名の内室を、大城の本丸に人質にとり入んとて、七月十七日、先細川越中守忠興の屋敷、城辺近き所なればとて大勢を遣し、人質にとらんとす。越中守の家老、言を尽して詫言すといへども許さず。既に兵共奥へ乱れ入て、内室を捕へんとする処に、内室傍に在し女に語り給ひけるは、我今敵の手にわたり、城中に入て諸人に面をさらしなば、大なる恥辱なるべし。又越中守殿、家康公への忠義のさはりとも成ぬべし。所詮我一人死なんにはしかじとて、自害せられければ、越中守家臣小笠原備前、河喜多石見などいふ者、門をさして防ぎ戦ふといへども、寄手大勢なればかなはずとて、屋形に火をかけ切腹す。越中守の内室は、明智日向守が息女なりしが父にはかはり、義ある婦人にて、死して佳名を残し給へり。此後は是にこりて、諸大名の内室を城中へ取んとはせざりけり。

○栗山大膳・第二章（岩波旧版全集著作篇第六卷10頁）

兎角するうちに七月十七日になつた。いよく徳川方の諸大名の夫人を、人質として大阪城の本丸に入れることになつて、豊臣方では最初に城に近い細川越中守忠興の邸へ人数を差し向けた。細川の家老がことわるのを聴かず、軍兵は奥へ踏み込んだ。細川夫人明智氏は、城内に入つて面を曝すのがつらく、又徳川家に対する夫の奉公に障つてはならぬと云つて、自刃した。家臣小笠原備前、河喜多石見等は門を閉ぢて防戦し、遂に火を放つて切腹した。豊臣方ではこれに懲りて諸大名の夫人を城内に入れることを罷めた。

※この場合は、原據の傍線の個所をとりのぞいただけのもので、この種の例としては極限的なものだ。

b・史料を集約して単純化し、事柄を鮮明にし、印象をきわやかなものにしてゆく。つぎのふたつの対照によつて、封建的な枠の中にいながら、その拘束をつとめてうちやぶり、自己を自由なところへおいてゆこうとする少

壮客氣の人物が、行動を通して造型されてゆくとところがあきらかになるう。

○盤井物語 1112 (「忠之公へ栗山大膳、黒田美作諫書之写」のうち)

^{論語}一非^ニ其鬼^ニ而祭^レ之諂也、見^レ義不^レ爲無^レ勇也、

然る処に、十七日は天下の御精進、殊更忠之様には御一門と申、其上此頃大御台所様御他界に付ては、京都より直に江戸へさへ可^レ被^レ成^ニ御座^ニ候と被^ニ仰上^ニ候程之御事に御座候間、取り分け此度は常々よりも清淨可^レ被^レ遊候所、御精進は扱置き、御鷹野被^レ遊候儀不^レ可^レ然奉^レ存候、第一大御台所様は忠之様御爲には御逢様分にて御座候事、

付り、人により大御台所様へ御弔を、御国にて御執行被^レ成、御下着より追付、御弔中は殺生禁断など被^ニ仰触^ニ御衆も、在^レ之由申候事、

^同一君子務^レ本、本立道生、孝悌也者爲^レ仁之本与、

然る時は、廿日は如水様御名日にて、久敷御歸国の御事に候条、幸如水様、道卜様御廟へも御参詣被^レ成候てこそ可^レ然る処に、左様之事は御沙汰も無之、結局御鷹野へ被^レ成^ニ御座^ニ候事

^同一慎^レ終追^レ遠、民徳帰^レ厚矣

然時は総別本儀に候はゞ、御歸城之日直に道卜様御廟へ御参詣可^レ被^レ成儀に候、左無く候はゞ、翌日敷遅くても廿日には、旁以御参り被^レ成候はで不^レ叶事御座候、已に以当將軍様毎月十七日紅葉山に御参詣被^レ遊候儀淋御存知之前に候事、

○栗山大膳・第二章 (岩波旧版全集著作篇第六卷15頁)

次に葬祭弔問のやうな礼がなほざりになるのが認められる。寛永三年九月十五日に大御台所と称せられてゐた前將軍秀忠の母、織田氏達子の亡くなつた時、忠之は精進をせぬのみか、放鷹に出た。家康の命日、孝高の命日にも精進をせず、江戸から歸つても、孝高、長政の霊屋に詣でぬやうになつた。

c. 錯雜した史料を分析し、ときほぐして合理的に秩序だて、その間、時には史料の空隙をも充実させてゆく。
『都甲太兵衛』（※一九一七年一月「大阪毎日・東京日日新聞」）でいうところの「思量のメカニズム」を活動させるわけだ。文学的論理と歴史的論理とが、こもごも展開されるのだが、合理精神によってみちびかれ、合理精神をもってつらぬかれる。これは、史料操作上の一形式であるばかりではなく、また、じつはさきに例示してきた a・b の場合も根本的にはこのなかへ包括されるはずであり、全体としての基本的方法でもあるのだ。原文引用の煩をばぶかなければならないが、このことは、例えば第三章の全体の書かれ方のなかに、よくうかがえるものと思う。江戸へ呼び出されての忠之側と利章との対決の展開を史料的に秩序だててゆくことが、おのずからこの章を構成してゆくことになっている。この章の中核的史料は、みてきたがように『栗山大膳記』であるが、これには長短二十六の断片が寄せ集められており、事件的に前後錯雜し、時日の不明確なものも少くない。それを一旦解体して、さきに示してきたような番号の順序に組み立てることで、文学的論理と歴史的論理が合理的に成立する。第三章は、この点では、比較的破綻なくとのえられているといえよう。

もっとも、細部においては、この章においても暇がないとはいえない。十一月十七日に、忠之が西の丸へ呼ばれて老中から申し渡された「家来の任用、肥後表へ差し向けた使者の件等は、公儀に於て越度と認める」というのはすでに福本日南がその『栗山大膳』（一九二五年刊）で指摘しているように、まったく意味をなさない。かりに、肥後への上使の迎接使として、名門の黒田市兵衛を副使とし、成り上りの倉八十太夫をかえて正使としたことを指すのだとしても、自然には受取れない。たしかに、『栗山大膳記』の「御家中之出入、肥後表之事指合御越度と被_レ思召上_二候_一」のよみちがえにちがいない。ここは、『盤井物語』の方にみえる「此度右衛門佐無調法、殊に近年

肥後、一件之儀も有之候処、旁以不届に被_レ思召上_二候_一云々と解さなくてはならぬであらう。日南はなお、善本の大膳記だといわれる『久太夫覺書』の一節をあげて、鷗外が、倉八十太夫が、「原城の落ちた時乱軍の中で討たれた」としているのを、根拠のないものとして、「嘘も亦甚だし過ぎる」といつている。もっともなことだが、これがいうところの歴史小説における「思量のメカニズム」からきたものにほかならないであらう。

☆☆

『栗山大膳』は、あきらかに、歴史小説として書き起こされている。封建的な伝統を墨守し主君を壻に安ぜしめようとする善意が、その善意のゆえに、当の主君と深刻に対立しなければならないという矛盾を孕んでしまう。そういう陰翳のある善意が、「生得・聰明な人だけに、老臣等に掣肘せられずに、独力で国政を取り捌いて見た」という、封建の粹のなかにいながら、そういうものからまる重苦しさから、いくらかでも自由な場所で呼吸をしてみたい少壮の心と、当然、対立し葛藤しなければならぬ。封建内部での自由への欲求と封建精神そのものが、主従関係と重なり合って対立しているこの関係が、日常的な感情となって具体的にあらわれてくると、「忠之の方で、彼奴ただけ功臣にもせよ、其功を恃んで人もなげな振舞をするとは怪しからんと思ひ、又利章の方で、殿がいくら聰明でも、二代統いて忠勤を励んでゐる此老爺を蔑にすると云ふことがあるものかと思つての衝突」となるのである。

鷗外は、こうした対立を心理的な面からとらえてゆこうとかかっている。そして、この対立心理を、その最大に

「緊張した」地点から、緊張へのすじみちを逆にたどり、心理の糸をたぐり寄せようとしている。これは、第一章から第二章の如水・長政への利安の忠義関係の記述がおわるあたりのところへつながって展開する。このような展開の起点をなしている第一章は、かならずしも「単に筋書をしたのみの物」としてはかたづけられない。「緊張」の頂点をつかんで、行動と事件を通し、人間の神経作用へまで迫っている。これは、まさしく小説への志向といわなければならない。あえていえば、心理小説的色彩を帯びているとさえいえなくはなからう。

そのことは、その「緊張」を「危機」へまで追いこんだ、忠之側からのヒステリックな激情の契機を、肥後事件に際して上使の迎接正使に任じた寵臣の倉八十太夫が、はからずも屈辱をうけたこと、つまり、忠之のせめてもの自由精神が、利章が代表する固陋な封建精神よりもさらに非情な封建精神の不意打ちをくらったことのなかに見出そうとしていることに、端的にあらわれている。これは、まさしく小説的解釈で、文学的論理での把握であり、人間深層部へ肉薄した表現でもある。たんなる歴史的論理による記述だとはいえない。

鵜外は、さきに引いたように、忠之を「生得聰明な人」とし、また、十太夫をも元来「伶俐な若者」としている。そういう忠之が、「老臣等に掣肘せられずに、独力で国政を取り捌いて見」ようとする自主的な意欲が、おのずから、いくらか不良少年的な奔放さともくずれをみせてゆくようにえがき、それを、あたかも、鵜外が官衙にあつて俗吏の蠢動をみる目と態度とを利章のなかへ移入したようなかたちで、封建の規制がふみにじられ、「形勢の委じて行く」のを、「目を鋭くして」みつめさせ、「次第にその委じて行く形勢を見分け」させるのである。が、忠之を、型通りの、底の浅い蒙昧無頼の徒、というふうにはもっていていない。日南は、鵜外が忠之を聰明だとした点を、小説的な絵空事にすぎないとして非難している。『栗山大膳記』や『盤井物語』には、「対決」に際し

て、忠之の「叡明」が老中によっても賞讃されたという記事もあるにはあるのだが、それはそれとして、忠之が暗愚無頼の徒にすぎないものとすれば、利章との対立が、内容の稀薄な、ほとんど無意味に近いものになってしまうであろう。かれを、もともと聰明な人物であるとするところに、矛盾関係が複雑になり、さきほどいつてきたこの作品の主題に深味ができる。

ただ、この主題を、文学的論理で徹底的に追求せず、歴史的記述へ、いつのまにか倚りかかって、史料の操作には、まえに見たように、部分的に、すぐれた技術を発揮しながらも、統一的な深い観照となって主題を重厚に確立せしめるものとして組織されず、けっきょく、主題が充實的に展開させられなかったこと、すなわち、そういういきさつで、歴史小説への意図が途中で挫折するともなく見失われていったこと、鵜外のいう「単に筋書をしたのみの物」となったことこそが、惜しまれるべきなのだ。歴史的記述へ倚りかかっていったための至は、第四章が第四章のようなかたちでしか書かれなかったところに、集中的にあらわれているといい。歴史的記述への倚りかからの気易さが、このような余録的な章を、余録的に未整理のままで放置し、史実的なもの自体のうちに、いちおうの満足を得させることになったのだといえよう。この作品の過渡的ないし架橋的性格は、こうしたところからのおのずからの帰結だったのである。そして、このような至への自覺が、『津下四郎左衛門』を経て、いうところの「小説」意識をいっそう強く排除してゆくことによって、『澠江抽象』における新たな「伝記の体例」の発想が次第に熟してゆく過程で、やがて、『梶原品』が書かれなければならない必然があったのだ。(一九五三・七・二二)